

博士研究員「研究成果概要」様式

氏名 田淵 恵

所属 文学研究科 応用心理科学研究センター

(三浦麻子教授研究室)

研究課題 心理学を基盤とするインタラクション評価システムの開発と応用

**【本プロジェクトの目的】**

本プロジェクトの目的は、複数人の相互作用事態で得られる生理反応や言語・非言語データを同期的に測定し、意識的なコントロールが及ばない心的過程を含めた多面的なインタラクション評価システムを構築することであった。この目的に従い、今年度は特に異世代間のコミュニケーションに着目し、言語・非言語側面のインタラクションデータを用いて、円滑な世代間コミュニケーションと心理発達のための理論モデルを構築することを目的とした。本研究は、これまで本プロジェクトにおいて蓄積された基礎的知見を社会に還元するための、応用研究として行われた。

**【本研究の目的】**

本研究の目的は、円滑な世代間コミュニケーションのための理論モデルを提唱するため、世代間のインタラクションが、高齢者の心理的变化に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

世代間インタラクションによって伝えられる先行世代の知恵や経験を次世代が活かすことは、社会が発展するために重要である。特に、先行世代が自分の失敗経験といった過去のネガティブな経験から得られた知恵を次世代に継承することで、次世代は同じ過ちを犯すリスクを回避して生き抜くことができる。高齢者の次世代に対する知恵の継承行動は、行動の送り手である高齢者と、受け手である次世代の若者双方にとって、ポジティブな影響があるとされてきた。高齢者にとっては、自分の生きた証を次世代に残し、社会的役割を譲り渡すこ

とができるため、心理的Well-beingの向上や死の受容、そして「世代性 (Generativity)」の向上につながるとされてきた(e.g. Aubin & McAdams, 1995; Kruse & Schmitt, 2012)。しかし、失敗経験から得られた知恵を次世代へ継承するという行動は、高齢者が自らのネガティブな過去を想起して次世代に開示しなければならない、高齢者自身が心理的リスクを負う可能性も高い。高齢者と若者双方にとってポジティブな影響のある「知恵の継承」を実現するためには、若者が求める失敗経験からの知恵を継承するという行為が、高齢者にとってどのような影響をもたらすのかを明確にする必要がある。

そこで本研究では知恵の継承場面での世代間インタラクションに着目し、過去の失敗経験とそこから得た知恵を継承するという場面において、若者とのインタラクションが高齢者の心理的变化にどのような影響を与えるかについて検討した。

#### 【本研究の方法】

**実験対象者：**実験参加者は64歳から77歳の中老年男性37名（平均年齢68.50±3.89歳）であった。

**実験デザイン：**実験デザインは、高齢者の知恵の内容（2水準；(a)成功経験からの知恵 (b)失敗経験からの知恵）と、受け手の若者の反応（2水準；(a)ポジティブ (b)ニュートラル）を操作し（被験者間）、世代性得点（2水準；(a)継承前 (b)継承後）（被験者内）を測定した。

**実験課題：**高齢者が過去の経験とそこから得た知恵について教えるという語り場面を設定した。実験参加者には“若い頃から今までの成功経験（あるいは失敗経験）から得た知恵で、のちの人生に役に立ったと感じることを、教えてください”と教示し、実験参加前にあらかじめ語りの内容について各自で整理してくるよう伝えた。語りはおよそ20分間とし、必要な場合は各自が持参したメモやアルバム等を参考にしながら語りを行うよう教示した。実験参加者は、約1.5m×0.8mの机を挟んで長辺に座し、相手(実験協力者)に対して約1mの間隔で対面に着座し、1対1で語りを行った。

**実験操作：**語りの受け手は、あらかじめ訓練された実験協力者（3名：18-22歳）が行った。性別の影響を統制するため、実験協力者は実験参加者と同じ男性とした。実験協力者は、実験者が作成した反応マニュアルにより、ポジティブ反

応およびニュートラル反応の訓練を行った。まず、実験者が反応マニュアルに沿って語り中の反応を実演し、次に実験協力者同士で実験協力者・参加者の役割を交代しながら反応の練習を行った。

**世代性**：短縮版Generativity尺度（田淵・中川・権藤・小森，2012）に回答を求めた。この尺度は5項目から成る1因子構造であり，LGS(Loyola Generativity Scale: McAdams & Aubin, 1992)日本語版，次世代への利他的行動，社会的活動，主観的幸福感との関連により妥当性が示されている尺度である。回答はそれぞれ“1.全く当てはまらない”から“5.非常に当てはまる”までの5件法で求めた。

**実験手続き**：実験は，2014年8月から10月にかけて行った。実験参加者は，知恵の内容×相手の反応の4水準のうちいずれか1つにランダムに割り当てられた。実験参加者は，あらかじめ郵送配布された質問紙調査で基本属性（年齢，教育年数，主観的健康感），世代性，日常生活場面における次世代への行動について回答し，実験当日に持参した。実験室来室時は，まず実験参加者が実験協力者に対して，約20分間の語りを行った。語り終了後，世代性に関する質問紙調査への回答を行った。実験協力者は語り終了直後に，一時退席した。質問紙への回答後，実験者が実験参加者と対面に着座し，約5分間，語りの感想等に関する面接を行った。その後，実験協力者が再度入室し，実験者によるデブリーフィングを行った。

**倫理的配慮**：本研究は，事前に関西学院大学の定める倫理委員会による倫理審査を受け，その実施を許可されたものであり，また実施の際にはその規定を遵守した（承認番号；2014-10）。

### 【本研究の結果と考察】

知恵の内容および相手の反応が，知恵の「語り」による世代性変化に及ぼす影響を検討するため，知恵の内容×相手の反応×知恵の「語り」前後の世代性得点（被験者内）の3要因分散分析（混合計画）を行った。その結果，2次の交互作用が有意となり（ $F(1, 33)=6.43, p<.05$ ），失敗経験からの知恵の「語り」の場合にのみ，若者のポジティブな反応によって有意に世代性が向上していることが明らかとなった（ $F(1, 33)=6.64, p<.05$ ）。

結果より，失敗経験からの知恵に若者がポジティブに反応する場合に，高齢者の世代性が向上するという仮説は支持された。先行研究では，若者は高齢者の

成功経験を基にした知恵よりも、自らが将来的にリスクを回避することのできる、高齢者の失敗経験を基にした知恵をより求めていることが報告されている(田淵・三浦, 2014)が、本研究の結果は、そうした失敗経験から得られた知恵を継承する場合の方が、成功経験から得られた知恵を継承する場合よりも、高齢者の心理的变化に対する若者の反応の影響が強いことを示している。

次世代への知恵の継承行動や世代性が高齢期に高まることの生涯発達の意味は、知識や知恵を次世代に伝えることで人生を肯定し、自分の存在が次世代の他者の中で生き続けることを実感でき、死への絶望感を乗り越えられることにある(Erikson, 1950)。一方、失敗経験からの知恵の継承といった「世代間緩衝」の行動は、次世代のためにあえて「経験の継承を断ち切る」行動であるため、自分の人生の一部を否定しなければならず、かつ当時に経験した負の感情を再体験するリスクを負う。本研究の結果から、高齢者が若者の求める知恵を伝授でき、それに対して若者が敬意や感謝を抱くといったポジティブな反応を返すことができれば、失敗経験からの知恵の継承といった心理的にリスクを伴う行動が高齢者にとってポジティブな心理的变化をもたらす可能性が示された。(3049字)

※ 字数：3000字程度（英語の場合：30行×2枚（A4）程度）